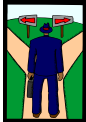


# 「取材を継続すべきか？」

## ー災害取材のクロスロードー

矢守 克也  
京都大学防災研究所



### 災害取材のクロスロード二分かれ道

- 第一線の取材活動で直面する厳しい判断二分かれ道→メディア報道におけるBCP（業務の継続）の基盤
- 防災ゲーム「クロスロード」
  - ー 阪神・淡路大震災における自治体の対応→「神戸編」
  - ー 「市民編」、「要援護者編」、「東海地震編」、「食品安全編」、「新型インフルエンザ対策編」、「消防編」、「学校安全編」、「海上保安庁編」・・・
- 「災害取材編」（w/山中茂樹さん）：  
「多くの十字架を背負いつつも、その中でやっていく覚悟を普段から固めておく必要があるのではないか。」





## 災害取材のクロスロード＝分かれ道

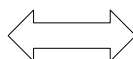
- 取材は、取材する者とされる者との接点でなされる。よって、取材継続の判断は、社内で完全に閉じて行うことは難しく、取材対象となる被災者や自治体職員との具体的な関わりの中でなされねばならない。
- この判断を求められる状況は多種多様であり、前もって、指針やルールを定めておくことが一般に困難であるため、一人一人の記者の心構えや価値観が問われる。「正解やマニュアルはない」（松波さん、昨年p.80）
- さまざまな意見、見解、態度、価値観をもつ多様な参加者による、事前の態度把握、意見交換、（できれば）合意形成のプロセスが重要。
- そこで、その一助として、「クロスロード」（災害取材編）は、いかがでしょうか。。。

### 「クロスロード」(災害取材編) サンプル①

□あなたは.....取材記者。

□被災した病院を取材中。ストレッチャー上の患者さんを撮影しようとして、看護師から、「この通り修羅場、猫の手も借りたい。撮影などやめて、すぐに手伝ってくれ」と言われた。撮影するか？

YES  
(撮影する)

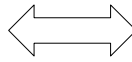


NO  
(撮影しない)

## 「クロスロード」(神戸編1026番)

- あなたは. . . . 被災した公立病院の職員。
- 入院患者を他病院へ移送中。ストレッチャー上の患者さんを報道カメラマンが撮ろうとする。腹に据えかねる。そのまま撮影させるか？

YES  
(撮影させる)



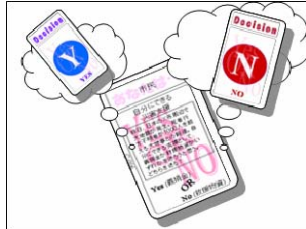
NO  
(撮影させない)



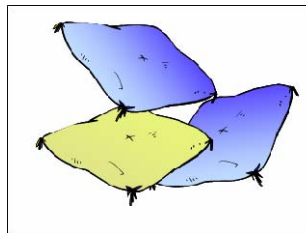
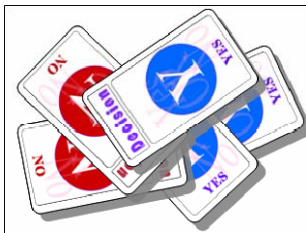
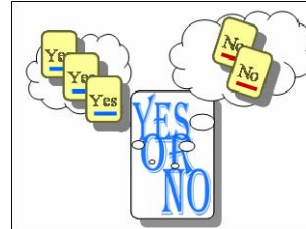
市民の生命と健康を守るために、  
質の高い心のごもった医療を提供します。

## クロスロードの基本ルール

1 YesかNoか—どうしよう...？



2 決断してY/Nカードを裏向けで



3 オープン...！

4 多数派＝青座布団(1人意見＝金座布団)

## 【1026】患者を撮影させる？

- 証言：「本当に患者さんを、亡くなられてるかたを搬送したり、いろんなときに、もう上からすごく撮られて。写真撮影をされたりしたときに、ちょっとイラッとして、そういうことをする間があったら手伝ってくださいということを言って、実際手伝っていただいたかたもあるのですが…あとから考えますと、やっぱりわたしたち当事者はそういう記録を残すことができないですね。そのときのことを口で伝えても、それは風化していきますし、事実の記録というのは、やはり報道関係者のかただろうなと思いましたので。…もちろん必要なときには人命が先だと思いますので、助けていただきたいとは思いますが…あとから記録として残して後世に伝えるということはちょっと難しいかなと思いましたので。こういう人たちも必要なんだなあということを思いました。」

証言を聞いてみよう

## クロスノート

---YES／NOの理由・条件を整理しましょう---

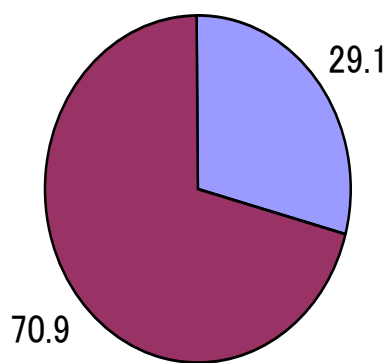
### ◆YES(撮影する)

- 記者として、災害を記録する使命がある。災害の記録として、この写真は必要。
- 一看護師に、取材を制限する権利はないのではないか。
- 災害は公共の関心事であり、記者が撮影するのは当然のことだ。
- (条件付)看護師よりも、患者本人か付き添いの人間の同意を得て撮影すればよい。

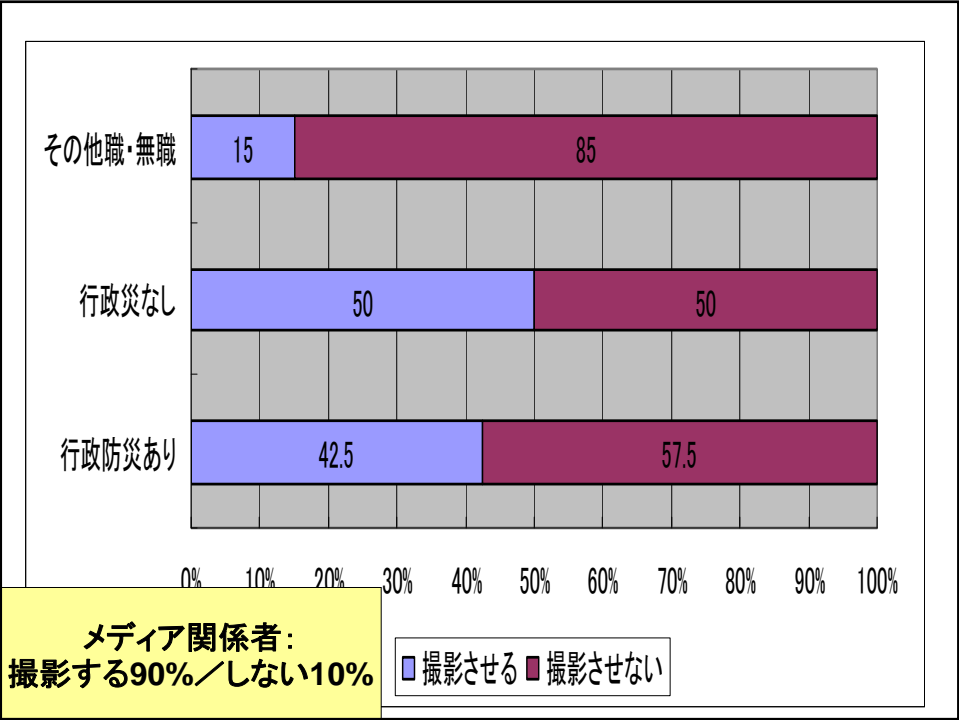
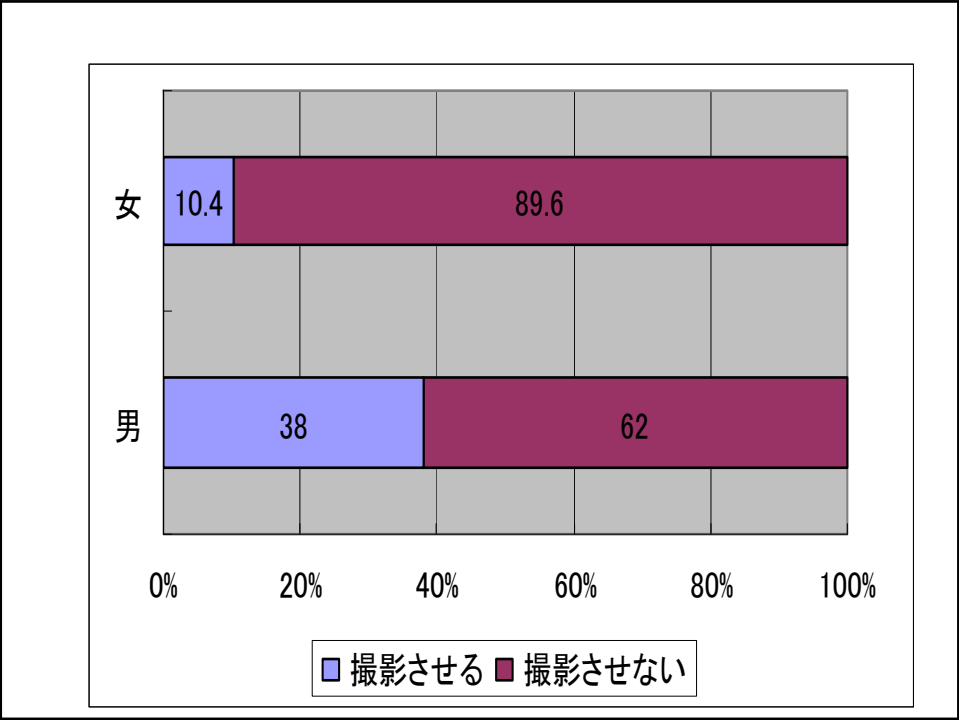
### ◆NO(撮影しない)

- 被害を伝えるために絶対必要な写真とは言えない。
- 少し離れて患者が写らないようにする工夫ができるはずだ。
- 記者である前に人間として、搬送を手伝うだろう。
- 病院の敷地内であれば、看護師の指示に従わねばならない。
- 要請を無視して撮影したとしても、後日トラブルになりかねない。

クロスロードアンケート版で全体的動向や性差、立場による差を理解  
→クロスロード新聞



■ 撮影させる ■ 撮影させない





## 山下美香さん(神戸市西市民病院)のお話①

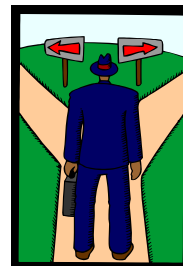
- 山下美香さん。1995年の阪神・淡路大震災当時、神戸市西市民病院の1年生看護師。
- 「遺体の搬送や患者さんの搬送のときに、玄関にマスコミのライトが煌々と点いて、かつ、たくさん野次馬がいて、無性に腹が立った。どうして、こんなものを見たがるのか、と。今思えば、患者さんの家族や、家族はいないかと探し求めていた肉親かもしれないのに。当時は、人の命を助けるはずの病院から亡くなった人が搬送される、なすすべもなく他の病院に搬送される、この敗北感、無力感がたまらなかったのだと思う。」
- 5年以上にわたって、何十回と、「クロスロード」のこの問題をファシリテートしていて初めて聞いた意見。「正解」はない。考え続けることに意味がある。

## 山下美香さん(神戸市西市民病院)のお話②

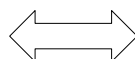
- 「この子、助けたって」と、亡くなっている赤ちゃんを抱いてきた夫婦。強心剤の注入。「ダメだとわかっていてもした。せざるをえなかった。」
- 「この人は亡くなっていますので」と立ち去ることなんてできない。その時も、実は、通常の量の3分の1くらいのところでやめた。それが今でも心に残る。その処置を一緒にした同僚は、その後仕事をやめた。」
- 「トリアージ」って、ほんとにできるんだろうか？
- 「この頃の記憶は、写真のアルバムをバラバラめくるみたいで、時間の感覚がおかしい。今でもそのときにいるよう。長いのか、短いのか。わからない。」
- 当時は病院に寝泊まりもした。「今なら1歳と7歳の子どもがいるので、這ってでも帰ると思いますが...」。
- 看護師1年生と15年目の中堅看護師の違い。

## 「クロスロード」サンプル③(神戸編1015)

- あなたは...市役所職員...です。
- 未明の大地震で、自宅は半壊状態。幸い怪我はなかったが、家族は心細そうにしている。電車も止まって、出勤には歩いて2、3時間が見込まれる。出勤する？



YES  
(出勤する)



NO  
(出勤しない)



【神戸市地域防災計画では】

- ・ 防災指令の種類、発令基準等(地震対策編応急対応計画 1－4 職員配備計画より)

種類	発令基準	配備につくべき職員	活動内容
防災指令第 3 号	本市域内に震度 5 以上の地震が発生したとき、(以下略)	全職員	予想される災害に対処するための準備措置又は発生した災害に対する応急処置

- ・ 動員の原則(地震対策編応急対応計画 1－5 職員動員計画より)

本市に所属する全ての職員は、勤務時間外においても、震度階級 5 以上(本市内に設置されている震度計が一つでも震度 5 弱以上を記録した場合)の地震が発生したとき(中略)、全市防災指令第 3 号が発令されたものとして、防災指令の伝達を待つことなく、自らや家族等の安全を確保した後、直ちにあらかじめ指定された場所へ出勤しなければならない。(後略)

【資料より】

1 月 17 日の職員の出務状況(「神戸復興誌」28 頁)

	出務職員数	計画数	出務率
市長部局(区、行政委員会を除く)	約 3,100 人	8,850 人	35%
区(福祉事務所を含む)	約 900 人	3,818 人	24%
消 防	約 1,300 人	1,372 人	95%
水 道	約 700 人	1,006 人	70%
交 通	約 850 人	2,249 人	38%
教 育	約 500 人	541 人	92%
合 計	約 7,350 人	17,836 人	41%

注 1 : 出務できなかった理由は、震災による交通遮断や職員自身の被災等。

注 2 : 局・部長は 17 日午後 6 時現在全員執務。

- ・ 被災した職員は全職員の 41.9%にのぼった。(「神戸復興誌」28 頁)

## 事例のご紹介

### ・事例1:「何でや?」:

「理解できへん」子ども。それでもお父さんは行く。そして 14 年経って、お父さんと娘は・・・。

### ・事例2:3時間遅れたことへの負い目と安堵感:

「その3時間大変だったんだ。・・・でも、あのまま出てたら・・・」

### ・事例3:遅れて出勤することに価値:

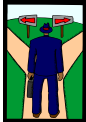
「そんな慌てて来んでいいと。これは長期戦や。・・・とかそういうものもリュックに詰めて出勤しました」



消防士の父娘 震災語る

の井さん「いつか現場で一緒に  
阪神興業で活動期を  
あつた可也市木清樹  
の可也市木清樹  
「お、井さん、文藝大で  
53」と、お婆さんが  
昨年、清樹さんより屋  
家の豪勢さん(21)が5日  
四市連の市立西小學校  
で今年76金前にも興業  
時の縁をを訪うた  
当時、消防機動隊に所属  
していた雅さん(4)は、車庫  
照明灯の目星が被らぬ  
ほど出動当初の過激な  
ほどと家に来るとのこた  
、共に居れば一街の空  
か満ちたデカオ散じ  
防犯カメラ、現在  
消防士21と学校  
で避難訓練指導  
た。避難訓練指導  
豪樹さんは、興業にな  
なるの仕事はしないか  
父とも話したいのか  
父と、一緒に現場に行  
い一話した。

- ・ お父さんっこ
- ・ なんでや？、当時小1、理解できへん、お父さんどこ？
- ・ 6つ下の妹、お母さんにも聞けない
- ・ 「お父さんかて、頑張ってるんや」とテレビに言い返す
- ・ 消防への興味→あこがれ→夢→実現。「家族にこんな思いさせてまです消防士の仕事って？」
- ・ 「震災がなかっても消防士にはなつてたかもしれへんけど、恰好だけだったかもしれへん」
- ・ 『1329人のうち2時間後50%、5時間後90%。全壊80人、半壊145人、一損壊390人。計615人が被害』
- ・ 『一人しか助けられへんかった～井上、お前をだすと帰ってけえへんやろ』



- 取材は、取材する者とされる者との接点でなされる。よって、取材継続の判断は、社内で完全に閉じて行うことは難しく、取材対象となる被災者や自治体職員との具体的な関わりの中でなされねばならない。
- この判断を求められる状況は多種多様であり、前もって、指針やルールを定めておくことが一般に困難であるため、一人一人の記者の心構えや価値観が問われる。
- さまざまな意見、見解、態度、価値観をもつ多様な参加者による、事前の態度把握、意見交換、（できれば）合意形成のプロセスが重要。
- そこで、その一助として、「クロスロード」（災害取材編）は、いかがでしょうか。。。。